

細川幽斎「九州道の記」における地名の詠み方

—実景と伝統の調和—

黄 逸松

中世末期の武将歌人細川幽斎は、「古今伝授」を代表とする多くの和歌伝統を後世へと伝えたことで和歌史において重要である。「古今伝授」については多くの研究がなされているが、それ以外に幽斎がどのような形で和歌の伝統を伝承したのかに関する検討はまだ不十分であると思われる。

現段階の成果として、二つの論文を東京外国語大学の論集『言語・地域文化研究』に発表した。一つは幽斎が伝えた歌論について、二条派歌学の金科玉条をそのまま伝えているように見えるものが実は、三条西家の秘伝もそこに織り交ぜられ、幽斎の取捨選択と組み換えによって再構築されたものと指摘した。もう一つは、幽斎が三条西公国に送った百首歌の組題の選択において、宮廷続歌会の伝統を伝承する意図があることを指摘した。

今回の発表は、幽斎の紀行文における歌枕の扱いに関する考察である。採り上げる作品は、「九州道の記」である。この紀行文は秀吉の九州征伐を受け、天正十五（1587）年四月二十一日から七月二十三日までの幽斎の旅を記録したものであり、途中幽斎が詠んだ和歌、発句、狂歌が収録されている。先行研究では、狂歌に見られる平俗化した表現を高く評価し、発句に見られる地方の人々との交流の意義を認めているが、地名を詠んだ歌に対しては伝統的な詠み方と位置付けている。しかし、幽斎は必ずしも伝統を踏まえて地名を詠んだのではない。旅の場面によって詠み方を変えているように見受けられる。

本研究では、地名、特に歌枕を詠み込んだ歌における幽斎の詠歌姿勢について分析する。往路、帰路、そして秀吉への近侍という三つの部分からそれぞれ幽斎の和歌を取り上げ、歌枕の伝統的な詠まれ方と比較する。さらに、幽斎の実体験がどのように詠作に反映されたかの視点から、幽斎の詠み方の特徴を明らかにする。その上で幽斎がどのように和歌の伝統を受け止めて、詠歌に活かしていたのかについて考察する。

細川幽齋「九州道の記」における地名の詠み方

—実景と伝統の調和—

東京外国語大学 黄 逸松

はじめに

天正十五(1587)年四月二十一日、豊臣秀吉の九州征伐¹を受け、細川幽齋(1534—1610)は居城の田辺から出発し、九州に赴いた。同年の七月二十三日に難波に帰還し、約三か月間の旅となった。その間に幽齋が詠んだ和歌や発句、人との贈答計八〇首は旅の記録とともに日記風に綴られ、「九州道の記」としてまとめられている。

紀行は題詠と異なり、作者は実際に景物を目にしてそれを題材にして歌を詠む。そのため、作者の実体験はしばしば歌に反映される。一方、幽齋は伝統的な詠み方に長じた歌人であり、典故や古歌を踏まえた歌を多く詠んでいる。では、「九州道の記」において、幽齋が見た実景と伝統はどのように詠歌に反映されたのだろうか。本研究では、このような問題意識をもって「九州道の記」の鑑賞を試みる。

一、先行研究整理と問題点

まず、「九州道の記」全体の基調について、林達也氏の研究²によれば、幽齋は歌枕についての伝承や観念を紹介することが少なく、さりげなくそれらを踏まえた歌を詠み、淡泊な記述で終わらせている。そのような姿勢はそれまでの紀行文と比べて新鮮だとされる。ほかに、鶴崎裕雄氏の研究³では、具体例の分析を通して、歌枕(あるいは名所)を詠んだ本歌取りと歌枕でない地名を詠み込んだ狂歌が多いという全体的な特徴が指摘された。

名所を詠む際に、本歌取りをするのは当時一般的な詠み方だと言える。一方、幽齋の歌学をまとめた『聞書全集』には「名所に読みならはさぬもの詠む事、其所へ行きては眼前に見る事、聞く事は證歌を求めずして讀むべきなり、習なり」⁴というような観点が見られる。つまり、名所において実際の見聞が詠み慣れていないものでも、慣例を求めずに詠むべきである。この観点は『八雲口伝』の「名所をよまむ事、常に聞きなれたる所をよむべし。但、其所にのぞみてよまむには、耳とほからむもくるしかるまじきなり」⁵に通ずるところがある。古くからの名所を詠む際の作法として捉えられる。

和歌において、実際の詠作と歌学理論は必ずしも対応していないが、名所を詠む際に、現地での見聞と名所の伝統は古くから歌人たちにとって重要な要素だと言える。それを踏まえた上で、本研究では、「九州道の記」において幽齋が詠んだ名所の歌を再検討し、実際の見聞と伝統とはどのように繋がるのかを明らかにする。方法として、「九州道の記」は紀行文であるため、本研究では幽齋の道のりに沿って本文を検討していく。紀行文全体を三段階(往路、九州滞在、復路)に分け、名所を詠んだ歌をそれぞれ取り上げ、幽齋の詠み方を考察する。

二、伝統の拠り所が窺える往路

まず、往路部分の区切りついて、幽斎が最終的に上陸した箱崎に到着した五月二十五日までを往路部分の終点とする。出発の四月二十一日から約一か月の間、山陰道に沿って船旅を中心に進んでいた。この期間の特徴として、名所を詠んだ歌からは幽斎が何を参考に伝統を踏まえていたのかが読み取れる。

例えば、「暮れわたる鐘の御崎を行く舟にわれは忘れず古郷の夢」(『衆妙集』715 番)が挙げられる。これは幽斎がかねの御崎において、地名の由来を聞いた後、『勅撰名寄』という資料を想起し、『万葉集』の歌⁶を踏まて詠んだものである。この歌は先述した鶴崎氏の研究でも取り上げられている。鶴崎氏は『勅撰名寄』⁷が永正三年(1506)年成立の宗碩編『勅撰名所和歌抄出』だという可能性を指摘し、幽斎の歌が『万葉集』の歌の本歌取りであると指摘した。

それを踏まえて本研究で注目したいのは、まず、歌枕の伝統を把握するために、『勅撰名寄』のような歌枕類聚書を幽斎が頼りにしていたことである。次に、幽斎の歌は必ずしも『万葉集』の歌の本歌取りとは言い切れない。なぜなら、幽斎自身がこの歌に対して「かやうに言ひ戯れて」と評価し、また万葉歌の下の句をほぼそのまま援用した踏まえ方は、本歌取りの作法に相応しくない⁸。ゆえに、幽斎のこの歌は古歌をもじった狂歌⁹として捉えられる。

名所であるかねの御崎において、幽斎がわざわざ狂歌風に古歌を踏襲したのは、現地で聞いた地名の由来と『勅撰名寄』の記述の間にズレがあったからである。『万葉集』や歌枕類聚書では「金」という字が使われているに対し、実際では「鐘」であるべきと聞いたのである。このように、実際の見聞と伝統にズレがある場合、幽斎はそのまま伝統を援用するのではなく、実際の見聞に忠実な詠み方をしていることが窺えた。

三、伝統への意識が強い九州滞在

五月二十五日に箱崎に上陸した後、秀吉と合流するまでの間、幽斎はしばらく随所見物をしていた。七月四日秀吉が帰路に就き、幽斎もその後出発した。この期間に詠まれた名所の歌からは伝統への意識がより強く見られる。

例えば、幽斎が袖の湊において詠んだ二首が挙げられる。「いざさらばともに濡らさむ旅衣袖の湊の浪の枕に」、「日も暮れぬいざ舟寄せて寝もしなん引敷物には袖の湊を」(『衆妙集』719 番、720 番)。『新編日本古典文学全集』の注釈によればこの二首は『伊勢物語』の歌を本歌取りし、旅愁に恋の趣を添えた作である¹⁰が、本研究ではやや違う読みを提示したい。

そもそも、袖の湊は、現代の参考書『歌ことば歌枕大辞典』では歌枕として認定されているが、『勅撰名寄』や『五代集歌枕』などの類聚書にはその名前が見当たらない。しかし、歌言葉としての源流が『伊勢物語』二十六段の歌「思ほえず袖にみなとのさわぐかなもろこし舟の寄りしばかりに」にあることは首肯できる。勅撰集の恋歌にもよくみられる¹¹。

幽斎が袖の湊に臨んだ際に『伊勢物語』二十六段の歌を真っ先に想起したことは想像に難

くない。しかし、彼が詠んだ二首の歌を見ると、一首目には古歌を踏襲した痕跡が見られず、二首目は『伊勢物語』第三段の歌「思ひあらば葎の宿に寝もしなむひしきものには袖をしつつも」を踏襲している。幽斎はなぜこのような形で伝統を取り入れていたのか。

彼の思惑を解明するために、まずはなぜ『伊勢物語』二十六段の歌を踏襲しなかったかを考察する。一つの理由として、幽斎が頼りにしていた『勅撰名寄』のような歌枕類聚書に袖の湊の名前がなかったことが考えられる。「そでのみなと」という表現が『伊勢物語』に由来し、勅撰集に多く見られても、実際の地名との関係性が薄い。そのため幽斎は直接『伊勢物語』二十六段の歌を踏まえることをしなかった。もう一つ考えられる理由として、幽斎はすでにこの旅において『伊勢物語』二十六段の歌を踏襲したことが挙げられる。それは五月七日あたり、幽斎が浦小畑という港にたまたま唐船を見て詠んだ一首である。「われもまた浦づたひして漕ぎとめぬ唐船の寄りし湊に」（『衆妙集』706 番）。初句の「われもまた」は『伊勢物語』の昔男を意識した表現である。従って、短い間に同じ古歌を二度踏まえることを幽斎は避けようとしていたかもしれない。

『伊勢物語』二十六段の歌を取り入れることが叶わず、代わりに第三段の歌を踏まえてもう一首歌を詠んだことから、幽斎は袖の湊と『伊勢物語』との関係性を強く意識していたことが窺える。そして、第三段の歌を取り入れる際に、その手助けとなったのは幽斎が見た実景だと推測できる。注目すべきは二首目の歌の初句「日も暮れぬ」である。それによって、「暮れ」、「寝」、「引敷物」、「袖」といった表現が繋がり、『伊勢物語』第三段の歌は自然と流れ込む。しかし、本文の前書きによれば、幽斎が袖の湊に向かった時は「日高く侍りければ」と記してあり、つまり正午ごろである。それを踏まえて、この二首全体は幽斎が『伊勢物語』と袖の湊を結びつけることに悩んだ挙句、夕暮れに触発されてできた作として捉えられる。

四、実際の見聞が際立つ復路

七月四日秀吉と別れた後、幽斎は船で瀬戸内海を通過して山陽道を遡り、同月二十三日に難波に着いた。この二十日あまりの復路において、幽斎が詠んだ名所の歌には実際の見聞が際立っている。

例えば、「行く舟の追風きほふ明石瀉片帆に月をそむけてぞ見る」（『衆妙集』764 番）という歌が挙げられる。この歌は七月二十二日の明け方に、明石海峡を渡り、淡路島に寄り道をしようとした際の作である。本文の前書きによれば、寄り道をするために、追い風に対して片帆で受けていたことが分かる。「かたほ」は帆を斜めにかけることを意味する。同時に、「かたほなり（片秀なり）」という形容動詞があり、完全に整っていないさまを意味する。両者が掛詞となり、ちょうど二十二日あたりの半分欠けた月を表していると解釈できる。

明石は有名な歌枕で例歌は枚挙にいとまない。しかし、幽斎は自分が経過した時の様子をそのまま歌に詠み、「かたほに月を」という前例のない表現を生み出した。实景に忠実な詠み方である。

おわりに

総じて、「九州道の記」から、幽斎が名所を詠む際に伝統と慣例を念頭に置いたことは読み取れる。だがそれと同時に、実際の見聞を重視するという詠み方が底流にあることも見逃せない。「九州道の記」において、伝統を取り入れた歌を一言で本歌取りと言っても、それは単に古歌の表現を踏襲するという営みではなかった。伝統と現実との両方を理解し、その間にある距離感を踏まえた上で両者を組み合わせるという工夫が幽斎の歌から見られる。

注

和歌の引用・歌番号は全て古典ライブラリーの『新編国歌大観』『新編私家集大成』による。『国史大辞典』『新編日本古典文学全集』などの参考書類は JapanKnowledge による。

¹ 「九州征伐」という呼び方は『国史大辞典』による。豊臣秀吉が天正十五（1587）年に行なった島津氏平定の戦いをいう。

² 林達也 1989「中世を読み解く九州道の記―戦国武将の歌と戦」国文学解釈と鑑賞五四巻十二号 131―135 頁。

³ 鶴崎裕雄 2010「細川幽斎の紀行―もう一つの紀行紹介への布石」『細川幽斎―戦塵中の学芸』笠間書院 297―317 頁。

⁴ 『日本歌学大系 第六巻』95 頁。

⁵ 『日本歌学大系 第三巻』391 頁。

⁶ 「ちはやぶるかねのみさきを過ぐれども我はわすれずしかのすめ神」（万葉集・巻七・雑歌・1234）。

⁷ 永青文庫には幽斎奥書の写本が所蔵されている。細川家北岡文庫（永青文庫）,107―36―8 出典: 国書データベース, <https://doi.org/10.20730/100097003>

⁸ 例えば、二条派の重要歌論書『井蛙抄』には「私云、本歌をとれるやう、さまざまなり。一のやうは古歌の詞をうつして上下におきてあらぬことをよめり」（『日本歌学大系 第五巻』31 頁）のような言説がある。古歌の詞を踏襲する際に位置を変えることを推奨している。それ以後の歌論書にも似たような趣旨のことが書かれている。

⁹ 幽斎の時代はまだ狂歌の黎明期であるため、定義が曖昧である。林氏の研究では、「『狂歌』的な」という表現を使用しているが、鶴崎氏の研究では、「狂歌」、「狂歌風な」といった表現を使用している。幽斎の狂歌の本質については今後の課題にしたい。本研究では掘り下げる余裕がないため、一般的な表現「狂歌」を使用する。

¹⁰ 『新編日本古典文学全集 四八』557 頁。

¹¹ 例えば、「かげなれてやどる月かな人しれずよなよなさはぐそでのみなとに」（続後撰和歌集・恋二・734・式子内親王）。